

「特集:林 紘一郎の学問」に寄せて

田中 英彦*

今まで、情報セキュリティ大学院では、2009 年から「情報セキュリティ総合科学」と名付けた紀要を3号、発刊してきた。

vol.1 「実学」とは何か、創刊の辞に代えて:林紘一郎

vol.2 係長セキュリティから社長セキュリティへ:日本の経営と情報セキュリティ、林紘一郎

vol.3 特集:「東日本大震災とセキュリティに」よせて:林紘一郎

これらの紀要の中味は、暗号、Web アプリケーションセキュリティ、個人情報保護、統制とガバナンス、事業継続、リスク評価、ソーシャルメディア、情報リテラシー教育などであり、いずれも林紘一郎が巻頭言を書いている。

紀要は、林紘一郎の熱意によって創刊されたが、上からも明らかなように、その内容も林が実質決めてきたといえるであろう。ところが、その林の立場が 2012 年 4 月から変わった。情報セキュリティ大学院大学学長を退き、通常の教授に戻ったのである。それは、大学経営の仕事から離れ、大学教員としての専門家に戻ったことを意味する。林の学術的専門領域は、経済と法学にあるので、その専門家としての活動に専心し始めたといえるであろう。

この紀要第 4 号は、その変化を記念し、情報セキュリティ分野における経済と法学をベースに行った林紘一郎の寄与を、今一度確認し、今後を展望することを目的に編集され、林とその門下生により執筆された。

その寄与の詳細はこの紀要の本文に譲るが、ここに含まれる様々な執筆陣からも明らかなように、極めて広範に渉る。法学をベースに様々な考え方を披露し議論するかと思えば、企業経営の在り方を実社会の現状を踏まえつつ提言している。林の特徴は、従来の法学の考え方をベースにはしているが、それに捉われず、広く実社会に目を向けながら議論し、問題点をあぶりだすところにあるのではないか。

従来、法学は長い歴史と伝統があり、その体系には膨大かつ精緻な論理の積み重ねが存在する。経済についても同様であろう。しかしながら、世の中は様々な問題に溢れ、また新たな問題が日々発生する。そのような新たな事態を過去の事例に引き合わせ判断するというのが従来の考え方であった。しかし、コンピュータやインターネットという過去には存在しなかった道具が現れ、それが社会に不可欠の基盤となった現在、従来の事例をそのまま当てはめることはできないし、できるとしてもその当てはめには新たな解釈が必要になる。

* 情報セキュリティ大学院大学 学長・教授

コンピュータは記憶の正確さと量を著しく増強したし、インターネットは距離の観念を変えた。そのような新たな時代における法体系はどうあるべきか、経営はどうあるべきか、林は自由な立場から考察してきたように思う。技術の本質にも触れた発言や考察があるが、それは、NTT に所属して、技術開発を率いた経験があり、また NTT America の経営者という立場になった経験など、林の過去の実務経験がベースになっている。

また、林は、日頃多くの書籍を読み、書くという文筆家としての特性も有している。そのような姿勢は、いわゆる文系の人々の活動パターンであるが、それが発言や議論の肥やしになっているのであろう。縦横無尽な考え方、それが林の背骨を為す「体系」であるように思う。

元より、この紀要の目的は歴史を記述することのみにあるのではない。過去の事例の大切さは言うまでもないが、この 4 号は、従来の林の考え方をまとめ、その根幹にあるものを明らかにし、それを今後の在り方を考える基本手法としての「学」に昇華させたいのである。それは大変困難な作業であろうが、「学問をする」人々に求められる常なる課題である。さて、それがどこまで可能になったかは読者の判断に待ちたい。